

The Japanese Onco-Cardiology Society

日本腫瘍循環器学会

会報

2024/7

No.5

目次

● 理事長挨拶	1
● 教育 web セミナー	3
● 第7回（2024年）学術集会開催のお知らせ	4
● 第6回（2023年）学術集会開催のご報告	6
● 学会報告	

【国際交流】

Advancing the Cardiovascular Care of the Oncology Patient (ACC CardioOnc 2024)	7
Global Cardio-Oncology Summit (GCOS)	8

【国内交流】

第61回日本癌治療学会学術集会 特別ワークショップ	9
日本臨床腫瘍薬学会学術大会 (JASPO2024)	10
● 「腫瘍循環器診療 実践トレーニング」 の書籍出版の紹介	11
● 施設紹介 がん研究会有明病院	12
● 役員名簿	
● 編集後記	



一般社団法人
日本腫瘍循環器学会

<http://j-onco-cardiology.or.jp>

理事長挨拶

会員の皆様

一般社団法人 日本腫瘍循環器学会

理事長 南 博信

(神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科 教授)

昨年9月の理事会で理事長を拝命しました。小室一成先生が6年間にわたり率いてきた本学会のかじ取りを引き継ぐにあたり、身が引き締まる思いです。

1979年にアントラサイクリンの蓄積毒性として心不全が発症することが報告されて45年が経ちましたが、未だにがん治療の障壁となっています。以前は不可逆的と考えられていましたが、早期発見・早期介入により可逆的な集団もあることが分かってきました。しかしどのように早期発見し介入したらよいのか、ガイドラインに記述はありますが質の高いエビデンスに裏付けられているとは言えません。アントラサイクリンによる心機能障害は予防が第一ですが、海外で使用されているデキスラゾキサンは日本では使用できません。リポゾーム製剤の開発により心毒性が軽減しましたが、使用できるのは一部のがん種に限定され、アントラサイクリンがキードラッグである乳がんや悪性リンパ腫、肉腫には使えません。

2000年以後に分子標的薬が、2014年に免疫チェックポイント阻害薬が臨床導入され、がん患者の予後が劇的に改善しましたが、これらの薬物は心血管障害も引き起こします。HER2陽性のがんの治療に不可欠な抗HER2療法も心機能抑制を起こし、CMLの治療体系を変えたTKIは冠動脈を含む末梢動脈閉塞を起こします。QT延長作用を有する分子標的薬も多く使用されるようになりました。抗悪性腫瘍薬は代替治療がないため、心血管毒性のリスクが高くても使用せざるを得ません。静脈血栓塞栓症はがんの存在および抗悪性腫瘍薬治療により引き起こされ、がん治療を妨げます。ワーファリンに代わりDOACが治療に使用されるようになりましたが、民族差のため海外のデータをそのまま日本人がん患者に適用できないDOACもあります。がん関連静脈血栓症に対するDOACの有用性を評価した臨床試験において対照薬である低分子ヘパリンがわが国で使用できないため、わが国はがん関連静脈血栓症に対するDOACの臨床開発に参加できず民族差が評価できませんでした。これらのドラッグラグやドラッグロスの問題を解消するために腫瘍循環器領域の臨床試験体制をわが国で整備することが急務です。

がんに関連した循環器合併症の病態解明と治療開発のためには、基礎および臨床研究が必要です。2017年に設立されて以来、日本腫瘍循環器学会の会員数は年々増加しています。これは腫瘍循環器学の重要性が認識されている表れです。関心の高さを臨床の成果に結びつけるために、学会の果たすべき役割は大きいと考えます。アカデミアでの研究成果を臨床現場に届けるためには、臨床試験での検証が必要です。腫瘍循環器診療を各施設で確立し、臨床試験体制を整備しなければなりません。現在、各施設で腫瘍循環器の診療体制が整備されつつありますが、未だ十分とは言えません。2023年度の厚生労働科学研究「がん患者に発症する心血管疾患・脳卒中の早期発見・早期介入に資する研究（小室班）」では、全国のがん診療連携拠点病院等に心血管合併症・脳卒中への対応状況を調査し、早期診断・早期介入に資する医療提供体制や人材育成の課題を抽出し解決策を提言することを目指していますが、学会として全面的に協力していきたいと思います。製薬企業の公募型教育プロジェクトに応募した「がん患者における合併症としての静脈血栓塞栓症に対する認知を向上させるための教育プロジェクト」が採択され、教育編集委員会を中心に教育Webセミナーの充実等を図っています。これらの活動を通じて日本の腫瘍循環器診療の底上げにつなげたいと考えます。

日本腫瘍循環器学会は成長途中にあります。学会の規模ばかりでなく質も向上させ、わが国の腫瘍循環器学を発展させる必要があります。皆様のご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「教育 web セミナー」 教育 web セミナーのご紹介

教育webセミナーの第1弾が2021年9月にアップされてから3年が経過し、これまでの総視聴回数は16,530回に達しました。昨年は9,758回でしたので、現在でも多くの方にご視聴いただいています。国内外でガイドラインが発刊され、モニタリングと治療の指針が定まりつつあります。そのような中でも、教育webセミナーは各薬剤の基礎的な背景を含む作用機序や現場での対応など、実臨床において非常に有用な内容であり、専門的な知識を深めるのに役立ちます。学会監修の「腫瘍循環器診療ハンドブック」に沿った内容で企画されましたが、ハンドブックでは記載しきれなかった内容が本webセミナーでは詳しく学べます。全49項目の中から、その一部の内容を以下に紹介させていただきます。

1. 「がん治療関連心機能障害（CTRCD）とは」 大谷規彰先生

CTRCDの歴史とその分類に至った経緯が述べられており、自験例でのアントラサイクリン系抗がん剤とトラスツズマブによる心筋障害を比較して解説されています。

2. 「がん治療関連心機能障害（CTRCD）の診療 アルゴリズム」 泉知里先生

アントラサイクリンのエビデンスがまとめられており、GLSによるCTRCDの早期発見の重要性が述べられています。また、縦方向の収縮を評価するGLSが、心内膜側の異常を反映し有用である理由についても分かりやすく解説されています。

3. 「がん関連血栓症（CAT）」 窓岩清治先生

ハンドブックでは静脈・動脈血栓症の両方について詳細に記載されていますが、webセミナーでは静脈血栓症を中心に述べられています。静脈血栓症の疫学についてグラフを見ながら理解することができ、癌の進行度と組織因子の発現量や血小板数との関連についても解説されています。

4. 「抗HER2療法」 能勢拓先生

HER2の生理学的作用からシグナルカスケードが説明されており、抗HER2薬が作用する点について非常に分かりやすく解説されています。最後には、HER2によるCTRCDのリスクファクターについても述べられています。

以上、4項目のみご紹介させていただきましたが、全ての項目が10分程で視聴しやすいだけでなく、ハンドブックには記載できなかった点を含めた専門的な内容を知ることができます。改めまして、ご多忙のところスライドを収録していただきました先生方にはこの場をお借りして、心よりお礼申し上げます。会員の皆様には是非ご視聴いただき、各施設の皆様にもお勧めいただけますと幸いです。本webinarに引き続きご支援賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

執筆者：中川 仁

奈良県立医科大学 循環器内科 助教

〒634-8522 奈良県橿原市四條町840番地

PHS: 070-6565-5848 FAX: 0744-22-9726

E-mail: hitoshi.nakagawa@naramed-u.ac.jp

日本腫瘍循環器学会 presents

教育webセミナー

好評公開中!

がん治療に携わる皆様への教育を目的に学会として企画!
学会監修の「腫瘍循環器診療ハンドブック」に沿った内容で
ご執筆いただいた先生方にご解説いただきました。

※出版社とは関係なく非営利の企画です。



学会公式サイトTopの
このバナーをクリック!



第7回日本腫瘍循環器学会学術集会開催のお知らせ

会期： 2024年8月3日(土)～8月4日(日)
会場： アクエリひめじ(兵庫県姫路市神屋町143-2)
会長： 南 博信(神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科 教授)
学術集会事務局： 神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科
 〒650-0017 神戸市中央区楠町7-5-1
事務局担当： 今村 善宣(福井大学がん診療推進センター/血液・腫瘍内科)

ごあいさつ

「知の融合から創造へ」をテーマに、8月3日(土)～4日(日)の2日間の会期で第7回日本腫瘍循環器学会学術集会を姫路市で開催させていただきます。

乳癌や悪性リンパ腫、肉腫の治療のkey drugであるアントラサイクリンの心毒性は1970年代から問題となっていますが、未だ根本的な解決策は見出されていません。近年のがん薬物療法において分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の進歩は目覚ましく、治療成績が飛躍的に向上しましたが、循環器の合併症も増え問題になっています。これらを解決するためには基礎研究により病態を解明し、臨床研究により予防・治療法を開発する必要があります。研究成果である知を融合し新たな治療開発という創造へ繋げる学術集会を目指したいと思います。

今年のみどころの一つは免疫チェックポイント阻害薬による心筋炎です。免疫チェックポイント阻害薬の使用が増え続けていますので、免疫関連心筋炎も確実に増えます。免疫関連心筋炎を世界で初めて報告したUCSFのMoslehi先生を姫路にお招きし講演いただきます。講演に引き続きシンポジウム「irAE心筋炎の理解と対策」で掘り下げ、重篤性が高い免疫関連心筋炎のわが国での基礎・臨床研究の発展につながることを期待しています。

QTc延長作用を有する分子標的薬が多く臨床導入されています。がん治療では代替薬がない場合が多くQTc延長を気にしながらも使用せざるを得ません。その現状と対策を議論します。分子標的薬にも心筋障害

を惹起するものがあります。抗HER2抗体に細胞毒を結合させた抗体薬物複合体の使用が急速に拡大しているため、心毒性についても注意が必要になると思われます。以前からがん及びがん治療に伴う静脈血栓症はとりあげられてきましたが、分子標的薬のなかには冠動脈を含め末梢動脈閉塞症を高率に惹起するものがあります。今年は静脈血栓塞栓症ばかりでなく動脈血栓塞栓症も取り上げます。これらについてそれぞれシンポジウムで議論します。

第7回
日本腫瘍循環器学会学術集会
 THE 7TH ANNUAL MEETING OF THE JAPANESE ONCO-CARDIOLOGY SOCIETY
Onco-Cardiology
 ~知の融合から創造へ~
 - Integration of Science for Innovation -
 2024
8月3(土)・4(日)
アクエリひめじ
 〒650-0017 兵庫県姫路市神屋町143-2
会長
南 博信
 神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科 教授
演題募集期間
 2024年1月23日(火) 正午
 ~ 3月5日(火) 正午
 主催事務局
 神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科
 〒650-0017 神戸市中央区楠町7-5-1
 運営事務局
 株式会社「インタープラン・コーポレーション」
 〒150-0046 東京都渋谷区神宮前1-26-4 東横ビルディング404
 TEL: 03-5422-3301 FAX: 03-3461-8181
 E-mail: jocs2024@interplan.co.jp
<https://www.jocs2024.org/>

現実問題として、実臨床でどのように腫瘍循環器診療体制を構築したらよいのか困っている医療機関の方も多いと思います。そこで「先例に学ぶ腫瘍循環器診療の立ち上げと運用」、「腫瘍循環器領域における多職種連携～こうやって作り上げてきました～」の二つのシンポジウムを企画しました。また男女共同参画委員会企画の「より良いチーム医療を目指したD/I:現場からの提言」も役立つはずです。

国内外の腫瘍循環器ガイドラインが発刊され、CTRCDを早期発見するために様々な提案がなされています。しかしエビデンスが乏しいものが多く、現場では個々の症例で試行錯誤していると思います。その現状を「CTRCD早期診断のためのサーベランス:現場の本音トーク」のシンポジウムで議論します。

循環器の先生からがん薬物治療を体系的に学びたいという声を多く聞きます。そこで、教育研修委員会に移動することなく同一会場でがんの薬物療法全般を学んでもらえる6コマの教育講演を組んでもらいました。

今年はMoslehi先生の他に、もう一人海外講師

を招聘します。今年のGlobal Cardio-Oncology Summit(GCOS)を開催するミネソタ大学のBlaes先生をお呼びし、世界の状況を紹介していただきます。日本の腫瘍循環器学の発展のために参考にしたいと思います。Blaes先生はOncologistであるため日本の腫瘍内科医がもっと腫瘍循環器領域に興味をもってもらうことも期待しています。日本の腫瘍循環器学の発展のために、ぜひお二人の海外招聘講師と交流していただければと思います。

多くの方に参加いただき第7回日本腫瘍循環器学会を盛り上げていただければと思います。8月3日(土)の夜は懇親会も予定しています。奮ってご参加いただき交流していただければと思います。姫路でお待ちしています。

第7回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
南 博信
(神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科 教授)

「第6回学術集会開催のご報告」

第6回日本腫瘍循環器学会学術集会を2023年9月30日(土)、31日(日)に神戸国際会場で開催しました。COVID-19の感染拡大で第3回から第5回の学術集会はオンライン開催となり、会員の皆様の交流が大きく制限されてきました。今回はCOVID-19の感染が落ち着き、4年ぶりの現地開催(一部はオンデマンド)で会場は熱気にあふれていました。来場者数は会員227名、非会員139名とメディカルスタッフ88名、初期研修医、学生17名、企業関係者20名など合計は526名でした。2022年8月に欧州心臓病学会(ESC)から世界初の腫瘍循環器のガイドラインが発行され、2023年3月にはわが国の腫瘍循環器のガイドラインが発行されました。このような背景を踏まえて今回の学術集会のテーマは「エビデンスのその先へ: Beyond Guideline! Where Should We Go?」とし、ガイドラインセッションを設けるなどその内容について議論する機会を設けました。学術集会ではESCのガイドラインの筆頭著者のAlexander Lyon先生(Imperial College London)からESCのガイドラインについて講演いただき、日本からは本邦のガイドライン作成委員会委員長の矢野真吾先生をはじめガイドラインの作成に携われた先生からその内容について解説いただき、理解を深めました。代表理事講演では小室一成先生から腫瘍循環器学の重要性和将来展望についてお話しいただ

きました。また、Keynote Lecture ではSamsung Medical Center (韓国) のEun Kyoung Kim先生から腫瘍循環器診療における心エコー図のGLSの意義について講演いただき、韓国での実際の診療体制についても話していただきました。教育講演では「がん専門医から循環器専門医へ」「循環器専門医からがん専門医へ」とお互い分野の理解を深める機会を設けました。各種委員会セッションや一般演題など多くのプログラムで活発な議論が行われ、会場は熱気が感じられました。若手の活動を活性化するために若手研究者奨励賞、優秀演題賞(基礎・臨床)を表彰しました。

本学術集会では腫瘍循環器学の最新の情報を共有し、議論する機会になったと思います。また、久しぶりの対面の開催となり、会場では会員同士の交流が見られました。会員懇親会は神戸どうぶつ王国で開催し、広い開放的な場所で会員同士の交流も活発に行われました。おかげさまで盛会のうちに終了することができました。最後に学術集会で参加いただき、盛り上げてくださった皆様に心より御礼を申し上げると同時に、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

2024年(令和6年)7月

第6回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
平田 健一

第6回日本腫瘍循環器学会学術集会 事務局長
田中 秀和

● 学会報告 ●

Advancing the Cardiovascular Care of the Oncology Patient (ACC CardioOnc 2024)

米国心臓病学会の腫瘍循環器研究会 (ACC CardioOnc 2024)は2024年2月9日～11日(9日はpre-conference)に米国ワシントンDCのHeart House (ACC本部)で開催されました。

2月10日からの本会議は、Course ChairでありJACC CardioOncologyのEditor-in-ChiefでもあるDr. Bonnie Kyのwelcome commentから始まり、"Cardio-Oncology communityからの視点"、"免疫療法"、"肺がんと心血管リスク"、"泌尿器がんと心血管リスク"、"小児がんサバイバー"、"非薬物、薬物による心保護"、"がん患者のリスク層別化"などのテーマに進みました。各々のテーマで複数の症例提示があり、聴衆にアプリを通じて解答を求められ、参加者の理解が深まるような工夫が随所になされておりました。

2月11日の本会議2日目は、米国臨床腫瘍学会 (ASCO)とのjoint sessionから始まり、Duke大の教授であり腫瘍内科医であるDr. Susan Dentが乳がん患者の心血管問題についてレクチャーした後に症例をベースにしたdiscussionが熱く繰り広げられました。その後、"幹細胞治療前／後に必要な心血管マネジメント"、"血液腫瘍、特に慢性リンパ急性白血病 (CLL)患者の心血管マネジメント"のテーマで講演と症例提示がなされました。日本におけるCLLの総患者数は白血病全体の1～2%と稀ですが、欧米では、白血病全体の20～30%を占める比較的頻度の高い疾患のため、提示される症例も様々で、大変勉強になりました。長期に渡り治療継続が必要な疾患であるからこそ心血管有害事象のマネジメントが重要ですが、そのマネジメントによるリスク(特に抗凝固療法による出血リスク)をどう最小化するかといったことに対する議論が多くなされました。最後はアミロイドーシスに関するレクチャーで会議が終了となりました。

本会議1日目は朝8時から昼食をはさんで午後5時半まで、2日目は朝8時から正午まで開催され、限られた時間で参加者に最大の学習効果を発揮できるように工夫が随所にみられた会議であり、大変有意義なものでした。200名程度の参加者で会場は満席であり、一旦席に着くと身動きが取れない状況であり、とにかく熱気に包まれた会議で議論も盛んに繰り広げられて

おりました。私事で恐縮ですが、初日は会場に参加したのですが、部屋の寒さと腹痛に加えて、会場が狭いため前の席の人が立った際のお尻で私のコーヒーがこぼれてしまい、そこで心が折れてホテルに帰り、それ以降はホテル自室でオンライン視聴となりました。これならワシントンまで行く必要は無かったのですが、これもいい思い出(?)になりました。

話が前後しますが、この会議は毎回開催前にプレテストが準備されています。今回は17問の症例問題であり、私はお恥ずかしながら10点でした。以下に間違った問題の一つを提示します。

40歳男性。16歳でⅢ期B型ホジキンリンパ腫を発症し、300 mg/m²累積量のアントラサイクリン系化学療法と21 Gyの胸部放射線療法を受けた。血圧130/80mmHg、LDL-C 90mg/dL、HDL-C 50mg/dL、トリグリセリド100mg/dL、HbA1c 5.4%、喫煙歴なし、現在服用している薬剤なし。虚血性心疾患の10年リスクの推定値として最も適切なのはどれか。

A. 1%、B. 5%、C. 10%、D. 15%、E. がんの既往歴があるため推定できない。

正解:C. 10%(ちなみに私は"E. がん歴のため推定できない"と答えて間違いました)。

小児がんサバイバー用の心血管リスク推定計算式 (<https://ccss.stjude.org/resources/calculators/cardiovascular-risk-calculator.html>)を用いると10%と算出できるとのことです。このような計算式があることを知らなかったので勉強になりました。いろいろありましたが、とても刺激になりましたので、また参加したいと思います。

執筆者：田尻 和子

国立がん研究センター東病院循環器科 科長

〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1

TEL: 04-7133-1111

E-mail: ktajiri@east.ncc.go.jp



● 学会報告 ●

Global Cardio-Oncology Summit (GCOS) GCOSの動向について

Global Cardio-Oncology Summit (GCOS) 2023がスペインのマドリードで9月27日から30日の日程で開催されました。GCOS2023は、9月27日に開催された「Basic and Translational Research in Cardio-Oncology Symposium」から始まりました。このシンポジウムでは、心血管系とがん治療の相互作用に関する最新の研究成果が紹介されました。9月28日と29日には本会議が開催され、臨床的な課題や治療戦略についてのセッションが続きました。例年は2日間の開催ですが、今回は30日のNurses Symposiumを含めて計4日間にわたり議論が行われました。第6回腫瘍循環器学会と同時期であったため現地参加はできませんでしたが、JACC: CardioOncology誌にて要旨が報告されており、それを参考にGCOSの動向について紹介いたします【J Am Coll Cardiol CardioOnc 2023;5:715-731】。

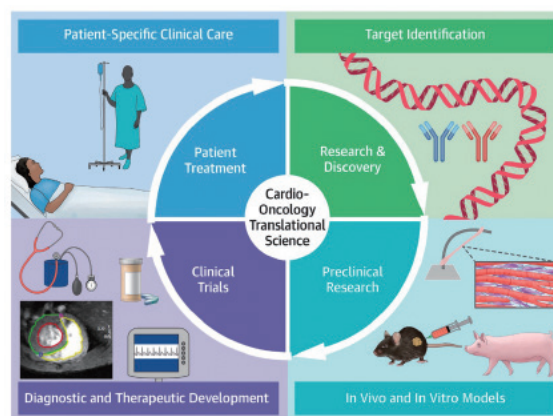
GCOSでは、がん治療に伴う心血管毒性(CTR-CVT)の課題に対処するため、トランスレーショナルリサーチの重要性を強調しています。トランスレーショナルリサーチは、新しい治療法や予防策が迅速に患者に提供されるために基礎研究と臨床応用を橋渡しする重要なプロセスです。これにより、心毒性のメカニズムを解明し、効果的な治療法を開発することで、がん患者および生存者の心血管系の健康を維持し、生活の質を向上させることが期待されています。

特に、アントラサイクリン誘発性心毒性(AIC)と免疫チェックポイント阻害薬(ICI)によるCTR-CVTの機序の解明や予防に注目が集まっています。AICの機序は、ミトコンドリア機能障害、酸化ストレス、および内皮細胞損傷が主要なメカニズムとして考えられています。これに基づいて、選択的マイトファジーの強化や遠隔虚血コンディショニング(RIC)などの新しい治療アプローチが研究されており、アントラサイクリンによる心

毒性の予防と管理に重要な役割を果たすとされています。ICIは依然として不明な点も多いですが、心筋炎だけでなく動脈硬化に関する免疫メカニズムの解明が進められており、臨床への応用が期待されています。多国間の共同研究も進行中で、知識とリソースの共有を通じて、より効果的なCTR-CVTに対する治療法の開発が加速しています。

今後の研究課題として、CTR-CVTのリスクを予測するためのメカニズムベースのモデルが必要とされており、これにより予防戦略の理解が進むことが期待されています。また、CTR-CVTに対する遺伝的要因の影響を解明するための研究も進行中で、特定の遺伝子変異が心血管毒性のリスクを高める可能性が示唆されています。

このように、GCOSはトランスレーショナルリサーチを通じて、前臨床および臨床研究から得られた情報が医師や研究者にフィードバックされることで、がん治療関連の心血管毒性を軽減し、患者ケアの計画とがん生存者の生活の質を向上させることを目指しています。



Salmon F, et al. J Am Coll Cardiol CardioOnc. 2023;5(6):715-731.

執筆者：森山 祥平¹、近藤 萌²

¹九州大学病院血液・腫瘍・心血管内科 助教、腫瘍循環器部門責任者

²九州大学病院血液・腫瘍・心血管内科 医師、腫瘍循環器担当医

〒812-8582 福岡県福岡市東区馬出3-1-1

臨床研究B棟 血液・腫瘍・心血管内科

TEL: 092-642-5228 FAX: 092-642-5247

E-mail: moriyama.shohei.636@m.kyushu-u.ac.jp

● 学会報告 ●

第61回日本癌治療学会学術集会

2023年10月19日～21日に大家基嗣先生（慶應義塾大学医学部 泌尿器科学教室 教授）が大会長を務められた第61回日本癌治療学会学術集会（61JSCO）がパシフィコ横浜で開催されました。その学会企画の一つとして本学会との連携のもと特別ワークショップ「Oncology meets Strokology, Cardiology, and Nephrology – Cardio-oncology–」が行われました。61JSCOの部会企画、特別企画、ワークショップ、シンポジウム、一般演題、国際学会との共同企画、企業共催セミナーなど、多岐にわたるプログラムで構成されていましたが、本ワークショップは癌治療学会において初めて腫瘍循環器を本格的に扱うプログラムとして企画され、小室一成先生（東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学）と向井幹夫先生（大阪国際がんセンター 成人病ドック科）の司会のもと以下の最新のテーマについての講演が行われました。

腫瘍循環器病学：循環器専門医の立場から最近の進歩と臨床現場での応用を探る（田村）・がん治療関連心機能障害の臨床的および基礎的側面（東京大学医学部附属病院循環器内科 石田純一先生）・がん治療に関連した心血管毒性（CTR-CVT）の予防やマネジメントについて（公益財団法人がん研究会有明病院 腫瘍循環器・循環器内科 志賀太郎先生）・がん薬物治療中の心血管障害（東京慈恵会医科大学医学部 腫瘍・血液内科 矢野真吾先生）

癌治療学会はがん治療に携わる医師の中でも外科系の参加者が多い学会であり、各講演者はOnco-Cardiologyガイドラインの内容の紹介や欧州心脏病学会ガイドラインの内容をふまえた講演をはじめとして、がん治療と心血管疾患の発症における注意点に焦点を当てた臨床経験を共有することで、参加者にとって非常に実践的な内容が提供されました。

Oncology meets Strokology, Cardiology, and Nephrologyと称された半日のセッションの中では、がん治療中に合併する脳卒中・腎障害と共に

腫瘍循環器についての講演が行われることで、参加者からは普段あまり意識することが多くない内科系の合併症に関して網羅的に話を聞くことができ、新鮮であったとの反響をいただくことができました。

癌治療学会における特別ワークショップが盛会に終わったことにより、がん治療における腫瘍循環器学的重要性が様々な領域の先生方にもあらためて認識され、今後のがん学際領域の発展に向けた新たな交流が得られました。企画から関与された司会の先生方をはじめとして関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

執筆者: 田村 雄一

国際医療福祉大学三田病院/国際医療福祉大学医学部
循環器内科学 教授

〒108-8329 東京都港区三田1-4-3

TEL: 03-3451-8121

E-mail: tamura.u1@gmail.com

写真：パシフィコ横浜の会場の中でひときわ存在感を放っていた巨大な学会のシンボルマーク。この前で写真を記念撮影する方が後を絶ちませんでした。



● 学会報告 ●

日本臨床腫瘍薬学会学術大会 (JASPO2024)

2024年3月2日、3日に日本臨床腫瘍薬学会の学術大会が兵庫県神戸市にて開催されました。大会HPは<https://convention.jtbcom.co.jp/jaspo2024/>。

この日本臨床腫瘍薬学会という学会（以下JASPO）は、病院、薬局、大学、製薬企業に所属する薬剤師やがん関連領域に関わるすべての人々が連携協力し合うとともに、がん薬物療法に関する学術研究の進歩や科学的根拠のあるがん薬物療法の開発・普及により、最善の治療効果の実現、副作用の軽減、重篤な健康被害の未然防止を図り、がん医療の発展や公衆衛生の向上に寄与することを目的とした学会とされており（<https://jaspo-oncology.org/>）、がん領域の薬剤師の学会では最も大規模な学会でもあり、認定制度もある学会となっています。毎年学術大会も多くの参加者が学会に足を運んでいます。

JASPO2024大会では実行委員長を務めさせていただきました。公募シンポジウムの他に実行委員からの企画として腫瘍循環器をテーマにし、日本腫瘍循環器学会と日本臨床腫瘍薬学会の共催シンポジウムを私の方で企画致しました。向井幹夫先生に御尽力を賜りまして、日本腫瘍循環器学会の理事会でJASPO2024での共催シンポジウム開催の承認をえることができました。向井先生には心より感謝申し上げます。

JASPO2024の学会のテーマが、大会長より「バタフライ・エフェクト～小さな羽ばたきから腫瘍薬学の発展へ～」となっていました。共催シンポジウムのテーマはこちらにちなんで「患者さんの副作用管理はパートではなく、トータルでサポートしよう！Onco-Cardiologyを勉強して薬剤師エフェクトを巻き起こせ【日本腫瘍循環器学会共催】」とさせていただきます。現場に則した、明日からの業務に活かせるような内容となるよう企画致しました。当学会でも大変御活躍されている国際医療福祉大学の田村雄一先生にお声がけをさせていただきました。田村先生は大変御多忙のところ当シンポジウムの講演をお受け下さいました。心より感謝申し上げます。JASPOの学術大会の参加者は病院薬剤師のみならず薬局薬剤師もが参加するため、病院薬剤師の演者一名、薬局薬剤師の演者一名の講演後（経口マルチキナーゼ阻害薬の心障害についての症例提示と薬剤師の介入事例を提示）の後に、最後に、田村

雄一先生の御講演（タイトル：進化するがん治療をOnco-Cardiology的視点から薬剤師が支援する！とは）の御講演を賜りました。田村先生には腫瘍循環器学とはという話から、実際に現場で薬剤師ができることは何かについて大変わかりやすくお話をいただきました。他の会場で同時に多くのシンポジウムが開催される中、当シンポジウムは会場ほぼ満席となる人気のセッションとなりました。聴講した薬剤師からは「とても勉強になった」「田村先生の講演がわかりやすかった」「腫瘍循環器の知識がついて、身近なものとなり、明日からの業務に活かしていきたい」という声があがり、企画した身としても有意義な会であったと実感しております。日本腫瘍循環器学会の理事長の南博信先生もシンポジウムに御参加下さいました。ありがとうございました。本シンポジウム開催にあたり、御尽力を賜りました多くの関係各位に心より感謝申し上げます。引き続き薬剤師ができることを探究して精進していきたいと思う所存です。学会の写真を掲載致します。



シンポジウム会場の風景 満席の会場



シンポジスト薬剤師2名（左から保険薬局薬剤師、病院薬剤師）、田村雄一先生、南博信先生、藤堂、座長の病院薬剤師（右）

執筆者：藤堂 真紀

埼玉医科大学国際医療センター薬剤部

薬剤部 主任 がん専門・指導薬剤師

〒350-1298 埼玉県日高市山根1397-1

TEL: 042-984-4646 FAX: 042-984-3709

E-mail: m_todo@saitama-med.ac.jp

「腫瘍循環器診療 実践トレーニング」の書籍出版の紹介

2000年代になりがん治療が進歩しがん患者の生命予後が大幅に改善した。それに伴って出現した新しい問題が、がん患者やがんサバイバーが循環器疾患を発症するといった腫瘍循環器である。本邦でも2010年以降腫瘍循環器に関する研究会が開催され、循環器やがんの関連学会でも腫瘍循環器に関するシンポジウムが企画されるようになった。そこで2017年10月に腫瘍専門医と循環器専門医が一緒になって日本腫瘍循環器学会が設立された。日本腫瘍循環器学会としては、腫瘍循環器学の啓発・普及・教育、診療体制の整備、疫学・臨床・基礎研究の推進、産官学連携の推進などを目標として活動している。ガイドラインの策定も学会の重要な目標であったが、完成までには時間がかかるということで、日本腫瘍循環器学会が中心となって2020年12月に「腫瘍循環器診療ハンドブック」を刊行した。幸いこの「ハンドブック」は好評を得たが、腫瘍循環器学の進歩は早く、2022年に欧州心臓病学会からガイドラインが発表され、本邦においても2023年3月念願のOnco-cardiologyガイドラインが発表された。大部の欧州ガイドラインも、Mindsに準拠した本邦のガイドラインも素晴らしい出来栄ではあるものの、多くの他疾患のガイドラインと異なり明確な指針を示すことができていない。その理由はとりもなおさずガイドラインに資するエビデンスが少ないことによる。今までがん患者の予後は大変不良であったために、がん以外の併発疾患について考慮することは少なかった。またガイドラインの元となるエビデンスとして重要なものは大規模臨床試験やメタ解析であるが、腫瘍循環器においてそのようなエビデンスは極めて少ない。循環器疾患に関する大規模臨床試験は数多くされているが、登録患者としてがん患者は除外されており、また逆に最近数多くされているがんの臨床試験において循環器疾患患者は除外されている。しかしエビデンスに基づいたガイドラインがない中でも、腫瘍循環器に関連する患者を診療する機会は確実に増えているため、実

際に腫瘍循環器診療を行うための指針が必要であろうと考えた。

そこでハンドブックやガイドラインとは異なる実地診療にすぐに役立つような本として「腫瘍循環器診療 実践トレーニング」を企画した。本書では、循環器専門医、腫瘍専門医ばかりでなく、実地医家、メディカルスタッフなど、がん患者の診療にかかわるすべての医療従事者が臨床現場で役立つようにいくつかの工夫をした。まず基本方針として最初に基礎知識を簡潔にまとめ、その後症例を提示して実臨床に即した解説をした。症例ごとにガイドライン等をどのように活かすか、またガイドラインに載っていない場合はどうするかについて、経験豊富な方に症例問題を解くトレーニング形式で解説していただいた。疾患や薬剤などの解説は理解がしやすいようにできるだけ図解し、診療をうまく行うための最新知識・Tipsなどを「Advice」として示した。

本書によって、姉妹書のハンドブックやガイドラインの理解が深まり、実際の腫瘍循環器診療が適切に進められることを心より祈念している。最後に本書の企画に関して大変お世話になった、日本腫瘍循環器学会幹事である国立がん研究センター東病院循環器科長の田尻和子先生に深謝する。

小室 一成

国際医療福祉大学副学長・東京大学大学院医学系
研究科先端循環器医科学特任教授

東京都港区赤坂4-1-26

TEL: 03-5574-3969

E-mail: komuro-tky@umin.ac.jp

施設紹介

No.5

がん研究会有明病院 腫瘍循環器・循環器内科の紹介

当会、がん研究会は1908年に創設され、1934年に東京の大塚の地でがん研究会附属病院を開設した。2005年に現在の東京有明地区に移転し、1日平均外来患者数1,800人、病床数686床のがん専門病院となった。コロナ禍前の2019年で手術数は年間8,800件を超え、外来がん治療室では年間約36,000件に及ぶ外来でのがん治療が行われている。種々のがん領域において診療数は日本トップクラスであり、まさにがん診療のハイボリュームセンターとして機能性、機動性を強みとし質の高い診療提供を目指している(図1)。

当科では現在、常勤の循環器専門医が3名在籍し、その他、連携協定を結んでいる東京都済生会中央病院の4名の循環器医が非常勤医として外来診療をサポートしてくれている。初診患者は毎月約200例で、当然だが、ほぼ100%がん患者である。診療内容は、日本でトップクラスのがん手術件数を誇る医療機関であることから、必然的にがん手術前のコンサルテーションが多い。その他、心毒性薬使用前の心機能評価、血栓症が多い(図2)。血栓症は月に約30例程度のコンサルトがあり、そのうち約半数の症例が肺塞栓を合併している。筆者のポリシーとして、ハイボリュームセンターとしての病院機能を失わないこと、つまり、高技術、機能性かつ機動性、スピードをあわせ持つ高品質な医療の提供を維持させることが大事だと考えている。一方、このハイボリュームセンターとしての病院機能、診療スピードを維持させつつ、少ない常勤循環器医の診療体制で循環器的安全性の両方の追求することは容易ではない。そのためには腫瘍医との診療科間連携など、多職種との連携が不可欠であり、日頃から腫瘍医やスタッフとのコミュニケーションにつとめ、診療科カンファレンスや新人看護師向け教育講演でレクチャーを行うなど、腫瘍循環器学の院内普及に取り組んできた。また、循環器診療の仕組みとして、循環器的評価に必要とされる各検査項目を取りまとめたセットオーダーを電子カルテ内に設定し、循環器医でない腫瘍医もこれらセットオーダーを利用し

循環器診療に備えることを可能とする仕組み作りも行った。それにより、少ない常勤循環器医の診療体制でもハイリスク患者への安全な循環器的スクリーニングの実施、そして、循環器診療に掛かる時間の短縮も獲得し、ハイボリュームセンターの診療スピードを損なわない診療形態を可能にしている。

依然、理想的な多職種連携の仕組みが整備できてはいないものの、今後も当科から積極的に多職種連携の構築につとめ、がん診療上の患者安全性をサポートし、当院に期待されるハイボリュームセンターとしての社会的役割を果たすうえでの重要な一役を担っていきたい。当然ながら、サポートのみならず日本屈指のがん診療専門機関として腫瘍循環器学の発展に寄与する研究成果なども貪欲に追及していきたい。

図1：当院の院内がん登録数は全国でもトップクラスの登録数となっている。

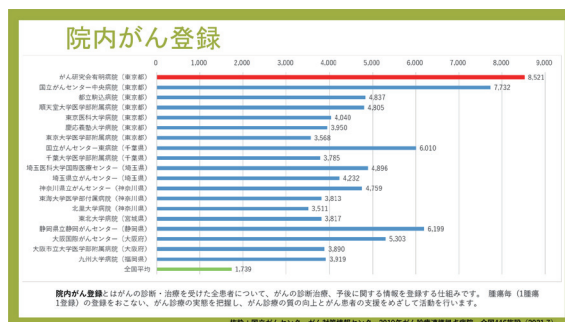


図2：当科メンバー、2024年5月の当科初診患者診療内容。がんハイボリュームセンターとして、がん手術前の評価依頼が必然的に多い。



志賀 太郎

がん研究会有明病院 腫瘍循環器・循環器内科 部長
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31
TEL: 03-3520-0111 FAX: 03-3570-0343
E-mail: taro.shiga@jfc.or.jp

● 役員名簿 ●

理事長	南 博信	(神戸大学大学院医学研究科)
副理事長	佐瀬 一洋	(順天堂大学大学院医学研究科)
理事	阿古 潤哉	(北里大学医学部)
	安斉 俊久	(北海道大学大学院医学研究院)
	家田 真樹	(慶應義塾大学医学部)
	池田 正孝	(兵庫医科大学)
	石坂 信和	(社会福祉法人同愛記念病院)
	泉 知里	(国立循環器病研究センター)
	大須賀 穰	(東京大学大学院医学系研究科)
	岡 亨	(埼玉県立がんセンター)
	絹川 弘一郎	(富山大学大学院医学薬学研究部)
	木村 晋也	(佐賀大学医学部)
	桑原 宏一郎	(信州大学医学部)
	坂田 泰史	(大阪大学大学院医学系研究科)
	笹野 哲郎	(東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科)
	佐田 政隆	(徳島大学大学院医歯薬学研究部 循環器内科学分野)
	清水 千佳子	(国立国際医療研究センター)
	竹石 恭知	(福島県立医科大学)
	田村 研治	(島根大学医学部附属病院)
	辻田 賢一	(熊本大学大学院生命科学研究部)
	照井 康仁	(埼玉医科大学)
	中村 真潮	(陽だまりの丘なかむら内科)
	野出 孝一	(佐賀大学医学部)
	坂東 泰子	(三重大学大学院医学系研究科)
	平田 健一	(加古川中央市民病院)
	三谷 絹子	(獨協医科大学)
	南野 徹	(順天堂大学大学院医学研究科)
	向井 幹夫	(大阪がん循環器病予防センター)
	保田 知生	(星ヶ丘医療センター)
	矢野 真吾	(東京慈恵会医科大学)
監事	石岡 千加史	(JR仙台病院)
	斎藤 能彦	(奈良県立医科大学)
幹事	赤澤 宏	(東京大学大学院医学系研究科)
	高橋 雅信	(東北大学大学院医学系研究科)
	田尻 和子	(国立がん研究センター東病院)

● 編集後記 ●

本号より会報は日本腫瘍循環器学会 広報委員会が企画・発刊を引き継がせていただくことになりました。短い依頼期間であったにもかかわらずご対応いただいた先生方にこの場を借りて篤くお礼申し上げます。

個人的には本学会には畠清彦先生(国際医療福祉大学)が大会長をされた第1回の学術集会の運営より携わらせていただいておりますが、海外の研究会・学会の紹介を行っていくところからスタートしたことを鑑みると、今回の会報に記事をいただいたように、国内の多くの学会と共同企画を行うことができ、その盛り上げりを共有できるようになったことは、たった数年間ですが隔世の感がございます。

なかでも印象的であったのが薬剤師が数多く参加する学会である日本臨床腫瘍薬学会学術大会における盛り上がりです。近年の学会の発展は医師だけではなく他の職種の方に如何に興味を持っていただけるかが大きなカギとなっており、循環器領域では例えば心不全学会では看護師が、心臓リハビリテーション学会では理学療法士をはじめとしたセラピストが数多く参加することで、ものすごい盛り上げりをみせております。腫瘍循環器領域の知識は薬剤師にとって大変重要かつ興味を持ていただけるものであり、本会報でも藤堂真紀先生に記事いただいた臨床腫瘍薬学会でのセッションの盛り上げりをみると、本学会のさらなる発展のヒントを垣間見た気がいたしました。

さて会報発刊の事業を引き継ぐにあたって今後広報委員会では、これまでの交流事業の紹介などに加えてどのような内容を盛り込んでいくべきか議論して参りたいと思います。会員の皆様からも内容についてご意見をいただければ大変ありがたいと思います。

田村 雄一 (広報委員会 幹事)
国際医療福祉大学三田病院/国際医療福祉大学
医学部 循環器内科学 教授
〒108-8329 東京都港区三田1-4-3
TEL: 03-3451-8121
E-mail: tamura.u1@gmail.com
Xアカウント: @TamCardio



写真: ACC2024(アトランタ)期間中に筆者が参加した際に撮影した日食の様子



日本腫瘍循環器学会 会報

(年1回刊行)

第5号 (2024年7月)

発行 / 一般社団法人 日本腫瘍循環器学会

編集 / 一般社団法人 日本腫瘍循環器学会事務局
(一般社団法人 学会支援機構)

● 入会案内 ●

正会員：この法人の目的に賛同して入会した個人
または団体（年会費：8,000 円）

賛助会員：この法人の目的に賛同し、この法人を
資金的に援助する個人および団体（年会費：1 口
50,000 円 口数に制限はありません）